

Glocal Tenri



6

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.24 No.6 June 2023

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

・巻頭言

教祖の「神がかり」

／井上 昭洋 1

・文脈で読む「身上さとし」(7)

明治20年10月の「おさしづ」

／深谷 耕治 2

・音のちから—中国古代の人と音楽 (14)

出土楽器が語る音の世界—^{けん}壠—

／中 純子 3

・ヴァチカン便り (62)

法王は4日間入院

／山口 英雄 4

・ニューヨーク通信 (16)

ニューヨークセンターに集う人たち

／福井 陽一 5

・思案・試案・私案

「碍」の字表記問題再考 (25)

仏教にみる障害者像

／八木 三郎 6

・おやさと研究所ニュース 7

2022年度おやさと研究所特別講座
「教学と現代」『元の理』を描く」
報告(金子 昭)／第356回研究報
告会／2023年度公開教学講座のご
案内／2022年度「教学と現代」／
2022年度公開教学講座のご案内

巻頭言

教祖の「神がかり」

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

天理教研究においては多くの「教外」の宗教研究者による研究がなされてきているが、それらの研究を研究対象とするメタ天理教学的な研究は全くなされていない。「教外」研究者の研究に対して単なる護教論的な反論ではなく、認識論的問題に関連づけた議論が天理教学者の側からなされていないのである。

信仰者と研究者の間に生じる問題について検討するためには、「教外」研究者の研究に見るディスコースを分析することが有効である。ある事例(研究論文の抜粋)を紹介したい。教祖の「神がかり」⁽¹⁾について言及している記述である。

もし善兵衛がみきの要求を、どこまでも拒み続けたらどうなただろうか。おそらく、みきは一しきり苦しんだ末に、民俗<宗教>の通常のパターンに復帰せざるをえなかっただろう。あきらめてひき返すということも、なお可能だったのだ。みきにとってはそれがより幸せであったかもしれない。心の奥ではそれを望んでいたかもしれない。みきの神の要求を蹴ることが、みきを守ることだったかもしれない。しかし事態はそう進まなかった。善兵衛は、けっして強く家を守るという意志を貫こうとしなかった。善兵衛はみきを見捨てたとさえいえよう。それもまた、善兵衛とみきの関係のあり方の運命的帰結だったと言ふべきだろうか。善兵衛が承諾してしまったことによって、奇妙な事態が生じた。みきは「神に貰い受けられる」ことになった。退路が断たれてしまったのだ。著者の声があまりにも支配的な「著者

版教祖伝」と呼んでよい今や古典となったこの論文において、そのタイトルに「神がかり」という言葉があるにも関わらず、神がかりなどなかったかのような描写が

見られるのは興味深い。

ここで問うべきは、このような(天理教を信仰していない)「教外」研究者の解釈に対して(天理教を信仰する)天理教学者はどのような立ち位置を取ることができるのかという問題である。これらの解釈に対して一信者の取る態度は比較的明快なものだ。「彼は親神の存在を信じていない。」とか「月日のやしろの意味について全く分かっていない。」という信仰世界の内側から声を発せればよいのである。

仮に、天理教の信仰を天理教学の前提条件とするのであれば、そのようなものとして天理教学を営む者も同様の声を上げなければならないはずだが、そのような声が上がったことはない。諸井の「2つの机」のエピソードが示すように、彼らは「教外」研究者による論考をおそらく全く異なる机の上でなされた研究と見なしてきたのではないか。天理教学がその形成過程において宗教学の影響下にあったことを考えると奇妙な問いかけではあるが、そのような(閉じた)天理教学は宗教学と再びの邂逅が可能なのかどうかを問わなければならない。それは、ネイティブ宗教学としての天理教学の構築に向けての問いでもある。

この事例は、「トランス」や「馮依」と呼ばれる現象を分析する心理学的、社会的ディスコースと言ってよいだろう。天理教を信仰する研究者も他の宗教を研究する際、これに類する宗教現象を同じ視点で分析するのであり、自ら信仰する宗教について同様の視点から解釈することが憚られるのであれば、それはどのような(信仰的ではなく)学問的な理由においてなのかを考える必要がある。

[註]

(1) 島園進(1977)「神がかりから救けまで—天理教の発生序説—」『駒沢大学仏教学部論集』8, pp.209-226.

増野正兵衛は、初めておぢばがえりをした時から教祖に「いづれはこの屋敷へ来んならんで」というお言葉を頂いており、入信早々から「どうでもお屋敷へ寄せて頂こう」と固く決心していた⁽¹⁾。

ところが、地元の神戸で商売が繁盛しているということもあって、妻をはじめ家内の人々はなかなかおぢばへの移転を決心できずにいた。このようなおぢば移転をめぐる家内の心模様は、明治23年1月におぢばに移転するまでの増野家に対する「おさしづ」のテーマの一つといえる。このことを念頭に置きながら、前回に引き続き明治20年10月の「おさしづ」を見ていきたい。

- ・明治20年10月4日(陰暦8月18日):増野正兵衛身上障り伺
- ・10月6日(陰暦8月20日)頃:増野正兵衛口中歯に付伺:真実さえ定めるならとの前おさしづ追って伺:ぢばには先生方打揃いあるに付、播州から招待受けたら参り候間御許し下さるや、又ぢばに止まって宜しきや伺
- ・10月12日(陰暦8月26日):増野松輔足不自由に付伺
- ・10月12日(陰暦8月26日):春野千代腹痛腰子宮痛み伺
- ・10月13日(陰暦8月27日):増野正兵衛神戸へ帰るに付御暇伺

明治20年10月4日、正兵衛の「身上障り」について伺っている。そこでは、「たゞ一つ道、天然自然というはこれまでの道、一つ胸締め、第一何なる事もさしづして置く」と、これまでの天然自然に成り立ってきた道についてふれながら、何事もさしづを与えておくと述べられている。

その2日後の10月6日には、正兵衛は口中の歯の障りに付いて伺うと、「めん〜真実さえ定めるなら、長く末の年限、天然自然の道よき処、事も日も、何たる日もある、年もある」というお言葉を頂いた。そして、さらにその「真実さえ定めるなら」という箇所について追って伺うと、「さあ今一時道の道、いかなる内々一つ、他所道、又々一つぢばの道もある」というお論しがあり、先々まで見据えた上での「ぢばの道」が伝えられている。

以前からおぢばに移転するか、神戸に踏みとどまるかについて思案を重ねていた正兵衛は、さらに「おさしづ」を伺い、「おぢばには他の先生方が揃っていることから、神戸から呼出しがあれば神戸に戻ってもいいか、あるいはぢばに留まったほうがいいのか」と尋ねている。すると、「一日でも用が無いと見えど、三人五人ではどうもならん」とおぢばで教理を取り次ぐ者が三人、五人ではどうもならないことが述べられ、「あちらでも順序運ばねばならん。一寸も話聞かさずでは分らん」と十分な取次者をそろえて何度も教理を伝えることの必要性が説かれている。立教のとき、「みきを神のやしるに貰い受たい」と望まれた親神に対して、中山家の人が、「他様に立派な家も沢山御座いますから」と言って断ろうとした場面が思い浮かぶ。

続いて10月12日、正兵衛の甥である増野松輔の「足不自由」について伺っている。そこには「いかなるも、一度ならず二度

ならず、今案じる、今案じる。心一つ戻るのやで。心というものは日々通るのやで」と、先案じせずに日々を通ることの大切さが説かれている。以前記したように、松輔については9月30日にも同じ身上の障りで伺っており、そこでは「たんのうの心神に供えてくれ」と諭されている。松輔に対しては「案じることのないように、たんのうせよ」と説かれている印象がある。

10月12日には、正兵衛の妻いと義姉である春野千代の「腹痛腰子宮痛み」についても伺っている。そこでは、「かりもの分かって、かりもの理自由分からねば何もならん」とあり、身上の障りをたんのうするには、かしの・かりもの理を十分に心に治めることの大切さが説かれている。最初の「かりもの分かって」とは、「かりもの教えを耳で聞いて知ってはいても」という意味に解される。

そして、その翌日の10月13日、正兵衛が神戸に戻ることになり、お暇を願いに伺うと、「いかなるもめん〜第一内々どんと一つ治める。隔て伝わらん話談じ、めん〜余の儀何程、付けた道は付けねばならん」と、改めて、家内を治めることの大切さが伝えられている。とくに「隔て伝わらん話談じ」とは、正兵衛の話がなかなか家内の者に伝わらない中でも、しっかりと談じるように、と諭されているということであろう。「付けた道は付けねばならん」と、親神の思いを懇ろに伝えてい

腹痛

さて、深谷忠政の『教理研究身上さとし』では「腹痛」の項目で明治20年10月12日の「春野千代腹痛腰子宮痛み伺」が扱われている。そこでは「借物の身上に一寸おしるしいたいたら、ほんとうにたんのうの理を治めよ。という意味で、腹痛は、たんのうの理を十分に治めよということを示されたのであろう」と解説されている⁽²⁾。

千代は、すでに7月23日にも「身上悩み」で「おさしづ」を伺っており、そのときには「救けて貰いたい〜。一時助け出けん」と諭されている。また、9月6日の「身の障り」についての伺いでは、「身の内たんのうの心定め」と諭されている。こうした流れを鑑みると、千代の身上悩み(腹痛)に関しては「かしの・かりもの理」「たんのうの理」「人たすけたら我が身たすかる」という、お道の根本的な教理を治めることを促されていることが分かる。とくに、そのような教えを耳で聞いて知っているだけでなく、その理を十分に肚に治めることの大切さが強調されているといえよう。

また、千代の10月12日の「おさしづ」の最後には「夫婦身上とは、一つ身の障り、たんのうして通らねばならん」とある。割書きに「子宮痛み」とあるので、夫婦の腹痛は、夫婦の事情に関する身上悩みとも捉えられよう。「たんのうの理」など、「腹痛」を通して肚に治めるべきお道の根本的な教理は、自分一人の問題ではなく、夫婦をはじめとする家内の関係において思案されるべきものであるとも考えられる。

[註]

(1)『稿本天理教教祖伝逸話篇』「一四五 いつも住みよい所へ」

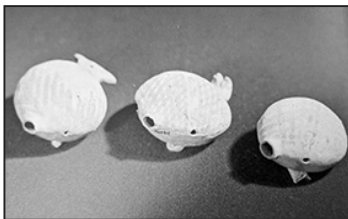
(2) 深谷忠政『教理研究身上さとし—おさしづを中心として』天理教道友社、1962年、170頁。

楽器なのか道具なのか

研究者の頭を悩ませたものに「壙」がある。壙は、土でできていて内側が空洞になっており、表面に孔があいている。形はさまざまで動物の装飾があるものもある。日本では「土笛^{つちぶえ}」と呼ばれ、縄文時代中期から晩期にかけてのものとして東日本から出土している。だが、一つ穿たれた孔を考古学者が吹いてみると、何ともいえない悲哀を帯びた音がでたので、とにかく楽器として報告されたというのが実情らしく、山田光洋氏によると、「土笛とされている遺物は比較的多く出土しているものの、土笛である蓋然性が明確に認められる出土例は今のところないといってよい」(『楽器の考古学』同成社 1998年 170頁)とある。しかしながら、弥生時代のものとしては、「陶壙」と呼ばれる、なかが空洞の卵形で、吹口が上部にあいていて、前面に4つ、背面に2つの合計6つの指孔が穿たれたものが出土している。これらは器形の微妙な違いはあるものの、形状・孔制(孔の位置関係など)はどれも非常に似ていて、強い斉一性が感じられるということである(同上 175頁)。陶壙は北九州から京都府にかけての日本海側の海沿いの地域に限って出土している。やはり大陸からの影響が考えられる。

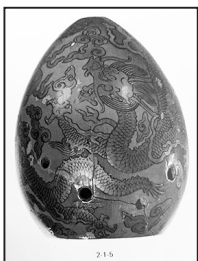
中国の壙

『中国楽器図鑑』(中国芸術研究院音楽研究所編 1992年 112



頁)には、殷周より前の夏代のもので魚形の壙が左図のように採録されている。しかし、上記の山田氏の縄文の壙への疑義が、これらにも当てはまりそうである。

殷代の壙としては14件出土していて、ほとんどが平底の卵形で、吹き口1つと、指孔5つという形態だそうである(張偉「殷墟壙的基本類型及其樂学特徴」『中国音楽学』2012年第3期)。続く周代においても、殷代の壙の形が踏襲されている(方建軍「洛陽北窯周壙研究」『中国音楽学』2008年第3期)。方氏の論稿によると、3度も壙の音を計測したが、息の入れ方によって音は大きく左右されてしまうので、音高の確定は難しいそうである。周代の王室制度が記されているとされる『周礼^{しゆらい}』春官に、「祝・歌・壙(埴)・簫・管」と楽器が羅列され、「六律六同の和を掌り、天地四方陰陽の声を辨じ、以て楽器と為す」という楽器の意義が書かれている。壙は『周礼』にみえることで雅楽の楽器として位置づけられていく。また、『詩経』小雅・何人斯に「伯氏は壙を吹き、仲氏は篪を吹く(兄がつちぶえを吹けば、弟がたけぶえを吹く)」とある。現存最古の訓詁(字句の解釈)書とされる『爾雅』釈詁には「壙(埴)は土を焼いてつくり、大きいのは鷺鳥の卵のようで、……孔は6つ、小さいのは鶏の卵のようだ」とある。戦国期に原形ができ、秦漢の間に成立したこの書に記された孔6つの壙が、後世にも伝承され定着した。また、上述の弥生時代に日本に入ってきた指孔6つの斉一性のある壙というの、この流れであろう。



日本では、弥生前期に現れ、弥生前期の末には衰退したとされる陶壙(前掲 山田光洋『楽器の考古学』175頁)であるが、中国では清代でも宮廷で使われた。左図の

如く龍の文様で飾られたものもある(『中国楽器図鑑』113頁)。詩のなかの壙

琵琶や琴の音色が美しく描かれた唐詩のなかでは、壙の響きはいかに詠じられていたのであろうか。先学には叱られそうだが、検索ソフトで探してみても、なかなか見つからない。しかし、全く無いわけではなく、杜甫、白居易や韓愈などにも幾らかはみえる。その詠じられ方には共通点がある。杜甫の「蕭十二使君に贈り奉る」(『杜詩詳注』巻二三)という詩を例にあげよう。これは、杜甫が蜀(四川省)で同僚だった人物に、後に贈った詩である。そこに、「壙篪^{ひびき おのずか}の鳴 自ら合し、金石^{ひかり いよ}の瑩 逾いよ新し」とみえる。鈴木虎雄氏の『杜甫全詩集』(日本図書センター 1978年 810頁)では、杜甫がこの人物との出会いを「この二人がであうてみれば壙篪がおのづから和鳴するごとく、金石の交情はその光いよいよ新たなるものがある」と訳出されている。それは明らかに先述の『詩経』を踏まえたものである。壙は篪とともに、兄弟のように調子がぴったり合うことを示すのに使われている。『漢語大詞典』に、「壙篪」で兄弟を意味するとあるほどだ。壙とともに



言及される篪とは、右図のような楽器である(『中国楽器図鑑』127頁)。これは、以前紹介した編鐘が出土した湖北省随県の曾侯乙墓のものであり、『爾雅』にも「竹を以て之を為る」とはっきりと説明される由緒ある楽器である。こうして壙と篪は、詩のなかに、仲睦まじい兄弟のような関係を示す言葉として刻まれた。しかしながら、筆者が詩に求める音色についての記述は無く、どうやら唐の詩人たちにとって壙は身近な楽器ではなかったようだ。

雅楽の楽器としての壙

その唐代中葉に作られた『通典』には、雅楽の楽器の説明として壙が取り上げられている。そこでは、周代の人とおぼしき暴辛公が壙を造り、篪も造ったと記されている。中国雅楽の世界で、周代からある楽器として壙は伝承されてきた。『周礼』春官では、雅楽楽器を「八音」とし、その材質によって金・石・土・革・糸・木・匏・竹と分類する。この分類は中国雅楽の楽器分類として踏襲され、宋代に編まれた音楽辞典である陳旸『楽書』二百巻のうち十六巻を占めている。「土」の属以外の楽器が上下の二巻に及んで長々と解説されるなかで、「土」は115巻に「土鼓・瓦鼓・古缶」というほとんど知られぬ楽器と「壙」の記載がみえるだけである。「八音」分類を継続するために壙は重要だったと思われる。

ここで冒頭にみた日本に壙が定着しなかった理由について、筆者なりの推測をしてみたい。日本音楽の代表的な研究者の一人笠原潔氏は、壙の音が鋭くなかったから受け入れられなかったといわれる(『埋もれた楽器—音楽考古学の現場から』春秋社 2004年 74頁)。しかし、先述の方建軍氏は周代の壙を調査した結果、その音色は甲高く、澄み切っていたとされる(72頁)。どうやら湿潤な日本の風土は土製の壙にその本領を発揮させなかったようである。加えて、中国の宮中宴饗樂を「雅楽」として取り入れた日本では、中国雅楽の「八音」分類を踏襲して壙を用いる必要がなかったのではと考えるのである。

法王は4日間入院

大ローマ布教所長
山口 英雄 Hideo Yamaguchi

法王は4日間入院

法王フランチェスコは、2023年3月29日、体調不十分な中、多くの信者を前にして、一般謁見を行った。その後宿舎に戻り、昼食を取った後に呼吸困難を起こし、急遽パトカーでジェメッリ総合病院へと運ばれた。診断の結果は気管支炎で、即入院となった。気管だけでなく、肺や心臓にも異常が見られた。病室は10階にある法王専用のフロアで、ローマ法王の寝室のほか、小チャペル、小サロン、大サロン、秘書の部屋、保安官の部屋、医師の集会室、キッチンが確保されている。これらの部屋は、廊下を中心にして両側に分かれていて、廊下の一方の突き当たりは壁になっており、廊下の他方の端がそれらの部屋への出入り口となっている。その前には階段があり、医師専用のエレベーターがある。法王は肺の治療を受けた。法王は治療後休息をとり、祈りに専念し、また差し迫った仕事をこなし、やがて体調も良くなった。世界のあちこちで、法王の早期回復を祈り、お見舞いの電報が次々と届いた。

3日目の3月31日には、フランチェスコ法王は順調に回復しており、もう大丈夫という感じになった。復活祭を10日後に控え、すべきことがたくさんあるのだ。そのために一刻も早く退院して、ヴァチカンに戻り、多くの信者たちに元気な姿を見せたがっていた。法王は12月17日生まれで、2022年12月に86歳になったばかりだ。その歳にもかかわらず、法王就任以降、訪れた国は40カ国にのぼる。法王は、復活祭の行事は何一つ欠かすことなく、自ら行う予定だったが、体がついていかない時には代理を立てることにしていた。

法王は自分の入院している部屋から一つ離れた小チャペルに、同じ病院に入院している「腫瘍」を持つ子どもたちを集め、ミサを行った。その中の一人はミゲル・アンジェルで、彼は生まれたばかりだった。法王は彼に洗礼を授け、お祝いに「復活祭」の時の卵形のチョコレートを渡していた。「今日からあなたはカソリック教徒です。法王フランチェスコから、洗礼を受けたと、周りの人に言い続けなさい」と言葉を添えた。法王は4月1日に退院して、ヴァチカンに戻った。そこでは、法王のことを心配していた6万余の信者たちが法王を待ちわびていた。

4月3日には、法王はボスニア＝ヘルツェゴビナ共和国のボルジャーナ首相と面会しなければならなかった。復活祭前の1週間は、キリスト教にとって一番大切な時だ。信者たちは法王の説教、お告げの祈り、教会の祝福の言葉、法王の世界のカソリック信者への呼びかけの言葉などを聞きたがっているのだ。法王は4月7日、退院6日後の夜に「聖金曜日」のVia Crucis（ローマのコロセオで行われる13階段への道）に臨席する予定だったが、本年は異例の寒さのためにやむを得ず欠席しなければならなかった。

現法王：就任後満10年経過

現法王の本名はジョルジュ・ベルゴリオという。彼は2013年3月13日に、コンクラーベの結果、266代目の法

王に選ばれた。法王名をフランチェスコと名乗った。初めての司牧の旅は、2013年7月8日だった。場所は、イタリア最南端のランペドゥーザであった。そこはアフリカのチュニジアに近く、多くの難民やヨーロッパ移住の希望者の“たまり場”である。彼らは船やゴムボートに乗って、ヨーロッパに向けて航海する。ランペドゥーザとチュニジアの港の距離は150kmで、ゴムボートで2、3日かかるようだ。地中海でも荒れる時がある。そんな時には、ゴムボートがひっくり返り、乗客は海に放り出される。船に乗るために、大金を払い運良くランペドゥーザに着いて、そこで数日間過ごしたとしても、彼らの望む北ヨーロッパへと行く道程は果てしない。海が荒れて、溺れて死んだ人もたくさんいる。そこで、法王は「我々は全てが責任者である」と述べ、さらに「この出来事に無関心なグローバリゼーション」の動きが進んでいると世界に訴えた。さらに世界が驚愕したのは、現法王フランチェスコが2019年4月11日、南スーダンを訪れた時だった。南スーダンの政治的リーダーに会った時、そのリーダーの前に膝まずき、彼らの足に接吻したのだ。「対立をやめ本当の兄弟として、接して欲しい。そして、平和であれ」とメッセージを残した。

法王就任以来の10年間は、昨年12月31日に亡くなった前法王ベネディクト16世名誉法王の影となり、日向となったりしていた。この二人の法王の存在が、ヴァチカン内部にいかにか影響を与えていたのだろうか。現法王はヴァチカン内部を改革しようとし、今までの法王と違うことを示すために、宮殿において起居しないで、ホテルのようなサンタマルタ宿舎に常住し、身に着ける十字架なども、材質は「金」ではなく、「鉄」を使っている。しかし、前法王がいるということから、現法王に従わず、彼に背を向けるもののがかなりいたようだ。つまり、現法王に反対する立場の者も多かった。しかし、前法王が亡くなったからは、現法王に対立する者が少なくなってきているようだ。現法王ならではの独自性を打ち出すのはこれからだと言う人もいる。

聖職者の結婚はありうるか

カソリック世界では、聖職者は独身でなければならないという暗黙の了解が続いている。世界の人々は「歴史的事実」としてこれを受け止めている。この件について、現法王は、「いや、これは規則であって、天命ではない」、「これは西欧教会（ラテン教会）の特色である」、「東方カソリック教会には、すでに結婚した神父もいる」、「ヴァチカンの司教の中にも一人いる。彼に先ほど出会ったが、彼には妻子がいる」、「ヴァチカンの秘書パロリンも言っているように、この問題は教義にしたがっているということではない」と発言してきた。そして、法王によれば、これからは人も変わり、時代も変わり、いずれ独身制度が変更されるかもしれないという。聖職者の独身制度は決して永遠の律法ではないようだ。

ニューヨーク市内から郊外へ

コロナ禍によるリモートワークの普及により、ニューヨークの市内から郊外に引っ越す人が増えている。ニューヨーク市を離れる人は、ニューヨーク州内に加え、ニュージャージー州、コネチカット州などトライステートエリアの移動が最も多いようだ。その主な理由は高額の住宅ローンや家賃によるものだとされている。以前からニューヨーク市に住んでいる人の収入の約半分が家賃に当てられていると言われてきたが、最近の調査では収入の約7割に達していることが分かった。また、治安面では、パンデミック前までは治安が向上し続け、安全な街だったが、経済の悪化やストレスなどの理由からか、犯罪が増加しており、最近のニューヨークの治安は決して良好とは言えない。ここ数十年では最も悪くなっていると感じる。市内のオフィスに行かなくてもいいのなら、安全で広くて安い郊外の人気が高まっている。

ニューヨークセンターに集う人たち

ニューヨークセンターに参拝に来られる人たちは、日本人、日系人が多数を占めているが、現地の教会、布教所、文化協会などを通して天理教を知り入信された人もいる。そして、アメリカ以外の外国でおいがかかり、その後ニューヨークに移住してきた人がおられる。現在センターに日参されている人は、香港でおいがかかり入信、現在ニューヨークに住んでいる。そのほかにもコロンビア、アルゼンチン、ブラジル、ペルーなどの中南米や台湾、韓国、ネパールなどアジアの国々で入信された人たちが参拝に来られている。

ニューヨークには、さまざまな国から人々が集まっているが、台湾や韓国出身の若い信者たちが留学や就職でニューヨークに住んでいる人も多いようだ。各拠点で丹精込められて育てられた若い人たちがどのようにして把握し、繋げていけるかが今後の課題でもある。各地の伝道庁や拠点と連絡を取りながら、そのような人たちにも参拝してもらえようしていきたいと思っている。

ニューイングランド講の誕生

一例としてコロンビア出身のアレハンドロ・ヒメネスさんを紹介したい。彼は若い頃コロンビアで入信、初代の熱心な信仰者だ。約20年前にアメリカに入国し、ニュージャージー州で働いていた。しかし、生活は苦しく落ち込む日々が続いた。ある時彼は、コロンビアを出発する時、所属の会長さんからいただいた手紙を思い出した。困った時にはここに連絡して、この手紙を見せなさいとのメッセージだ。そこには、ニューヨークセンターの連絡先が書いてあった。彼は英語がまだ全く話せなかったため、スペイン語で不安げにセンターに電話をした。たまたま電話を取ったセンターの職員はスペイン語が少し話せたので、話が通じ気持ちも和らいだ。その月からニューヨークセンターの月次祭に参拝し、センターの近くで仕事を見つけてニューヨークに引っ越してきた。その後、天理教語学院、海外部、天理大学、大教会勤めを経て現在ボストンに布教拠点を構

えている。天理大学でウクライナからの留学生と知り合い結婚、毎月の月次祭にはボストン近郊の信者が集っている。

今年5月末に「ニューイングランド講」の開所式が行われる。ボストンがあるマサチューセッツ州をはじめ、ニューハンプシャー州やメイン州の信者の集いの場として、ますます賑やかな拠点へと発展していくのが楽しみだ。

行きたくなるセンターへ

2024年6月には、アメリカ伝道庁創立90周年記念祭が執り行われる。ニューヨークを含むアメリカ東部地区から大勢の参拝者を迎える予定だ。記念祭へ向けての活動として家族、友人、コミュニティの人たちと信仰の喜びを分かち合うことが提唱されている。その方針を踏まえながら、3年後に迎える教祖140年祭へ向けて、ニューヨークセンターの活動方針を下記のように定めている。

- ・センターの充実「行きたくなるセンター」
- ・コミュニティへのひのきしん
- ・おちばがえり

具体的な目標としては次の通り。

- ・センター月次祭参拝者と初参拝者の増加
- ・毎月のにをいがけ活動とひのきしん活動
- ・おちばがえりの推進

現在、ニューヨークセンターの月次祭には、毎月約100名、多くて120名の参拝者が来られているが、より一層「行きたくなるセンター」になるよう内容を充実させて、3年後にはより多くの人々でおつとめを勤められるように教勢を伸ばすこと。そして、管内の教会、布教所、講社などの初参拝者を増やしていこうと話合っている。コミュニティへのひのきしんとしては、長い間続けてきた献血活動を再開し、現在、深刻な問題となっている血液不足に対応して、地域コミュニティへ貢献していきたいと思う。

ソウルファイヤー

今年6月末にアメリカ伝道庁の主催で天理教フェイスカンファレンス「SoulFire」がカリフォルニア州パームスプリングス市にて開催される。将来の天理教を担う若い世代を含む英語圏の教友が一堂に会して、英語で天理教の教えを学んだり、さまざまな社会問題を取り上げて話し合いが持たれる。コロナ禍の影響で開催が延びたが、現在、若いスタッフが中心となり力を合わせて準備を進めている。この行事開催に向けて文化協会も資金面で協力することができた。文化協会の開設以来お世話になってきた感謝を込め、初めてのご恩返しのようなこととなった。それと同時に若い世代の人材育成の一助となることができありがたいことだ。その後、不思議にもニューヨークの経済の悪化にもかかわらず、文化協会の日本語クラスの生徒数が開設以来一番多い登録数を記録していることが分かり二重に喜びを感じている。このカンファレンスが成功して、若い世代の人々が勇み、教勢の伸展に繋がるように願っている。

「碍」の字表記問題再考（25）仏教にみる障害者像

前回（4月号）は、『法華経』に記された「障碍」の表記とそれに関する人を表わす文言を検証した。その中、わかりやすく譬喩を用いて説法したといわれている第3章「譬喩品第三」に多く記述がみられた。

その表記は、「躄^{いざり}、盲、聾^{くぐせ}、背偃^{いんあ}、瘖瘖^{いんあ}」などである。「躄」とは「尻を地につけたまま進むこと」（『広辞苑』第5版）という意味であり、歩行障害の人に対する呼称で古くから使われていた言葉である。現在では「躄」は不適用用語として扱われ、マスメディアなどで耳に、目にすることはない。「盲」は今でも用いられている表記であるが、訓読みの「めくら」は廃止され、音読みの「もう」と発音して使われている。「聾」も旧来の「つんば」ではなく、音読みの「ろう」で使われている。「瘖瘖」は「聾」と同義語である。聴覚音声言語障害の人を意味し、中国の仏教文化を著す古文書の中で用いられている用語である。わが国では遣隋使、遣唐使以降、中国を「鑑^{かがみ}」にしてさまざまな法律を制定しているが、その中で障害のある人の表記も中国の文書より借用して表わしている。この「瘖瘖」もその一つであり、わが国では長年にわたって用いられ、主に裁判用語として使われてきている。しかし、1981年の「国際障害者年」以降は不適用用語として扱われ、改称されている。「背偃」は「病によって脊椎が曲がる姿」を意味し、わが国のみならず、古代中国のさまざまな文書の中に登場する言葉である。これも現在では不適用用語、差別用語となっており、目にすることはない。

輪廻転生

「障碍」の表記は仏教語として存在し、負の意味があるとの政府見解を検証するために本稿で言及しているが、仏教経典を見る限り確かにその見解を裏付ける結果となっている。厩戸皇子が撰述したといわれている『三経義疏』の注釈書である『勝鬘經義疏』『維摩經義疏』そして『法華經義疏』の中でも障碍の表記を確認している。

釈尊は『法華経』の教えの中で、生きとし生けるすべてのものは仏陀になる可能性を有し、また、人は何度も生まれ変わり、出変わりする「輪廻転生」の存在であることを説いている。生まれること、老いること、病になること、死ぬことなどすべてが苦しみであり、その苦しみにから逃れて解放される「解脱」を釈尊は説いているのである。

人はまた、生前の行いによって来世で生まれ変わる世界が決まり、「地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上」の「六道」があるとしている。とりわけ、地獄に陥る行為として「十悪五逆」の罪を犯さないよう戒めている。十悪とは、「殺生（命あるものを殺す）」、「偷盗^{ちゆうとう}（盗み）」、「邪淫^{じやいん}（淫らな男女関係）」、「妄語^{もうご}（嘘、偽り）」、「両舌^{りやうぜつ}（二枚舌）」、「悪口^{あくくち}（汚く罵る）」、「綺語^{きご}（戯れ言）」、「貪欲^{どんよく}（むさぼる我欲）」、「瞋恚^{しんに}（怒り、憎しみ）」、「愚癡^{ぐち}（真理に対する無知、愚かさ）」（『広説佛教語大辞典』）をいう。

五逆とは、「父を殺すこと」、「母を殺すこと」、「悟りを開いた聖人を殺すこと」、「仏の身体を傷つけること」、「仏教教団を破壊し、分裂させること」をいい、最も重い罪とされている。

これ以外にも、仏法を誹る^{そし}「謗法罪^{ぼうぼう}」も重罪であり、地獄へ墜ちる許されない罪としている。

これらの戒律を終生守り続けなければならないが、釈尊は一方で「地獄に墜ちる人間は星の数ほどいるが、人間界に生まれ変わることは至難のこと」だと述べている。

現代社会に照らし合わせて考えても、生きるためには食生活で間違いなく殺生をして自らの命を繋いでいる。釈尊の教えを守り通すことは至難のことである。

因果応報

『法華経』の「譬喩品第三」には、「『法華経』を誹り、非難する者、あるいは経典を誦誦し、写経する者、あるいは保持する者を軽んじて賤しめ、憎みそねんで、長い間怨みをいだく者があるならば、罪にあたる報を受け、死後は「阿鼻地獄」に陥るであろう。たとえ地獄から出られても、必ず畜生道に墜ちるに違いない。」と記されているが、仏法を誹る者は「謗法罪」によって「来世」は地獄に墜ちることが説かれているのである。

厩戸皇子は飛鳥時代の604年（推古天皇12）に「十七条憲法」を制定しているが、その第2条で「篤く三法を敬え、三法とは仏、法、僧なり」と説いている。謀反、疫病、各地で起こる天災地変などで荒廃した人々の心を治めるために仏教の教えにすがったのである。仏教の教えによって人々に「勸善懲惡」を説き、現世の行いによって死後及び来世の「六道の世界」を知らしめている。また、一人ひとりの人間に現れる個体差の優劣も、前世や現世での行いによって生じるとしている。「障害の有無」をはじめとして、病で苦しむこと、短命で人生を終わること、貧窮生活を余儀なくされること、出自によって差別を被ることなど、すべては「因果応報」の結果であるとしている。その題材の一つに、心身に障害のある人たちを登場させ、他者への戒め的な存在として扱い、因果応報の教えを人々に説いている。

こうした教えの影響を受け、親が子どもをしつける際に障害のある人を例にして、「悪いことをしたら、あんなふうになる」「罰があたった」などと常套句として口にした時代がわが国には存在する。また、大道芸人の口上で「親の因果が子に報い」という台詞で障害のある人を負の存在として見世物にし、語り継いできた史実も過去には存在するのである。

そして、それらはみな前世の因果応報の結果であり、絶対的真理であるかの如く人々に説いてきたことも事実である。こうしたわが国の「障害者観」は少なからず、宗教の教えと深く関係があるといえよう。特定の人々を例にあげて、すべては因果応報の結果であると教えを説くとするならば、これは明らかに差別であり、人権蹂躪の何ものでもなく、決してあってはならないことである。

[引用・参考文献]

- 三枝充憲『法華経現代語訳（全）』第三文明社、1978年。
- 菅野日彰『法華経・永遠の教え』大法輪閣、2006年。
- 並川孝儀『ブッダたちの仏教』筑摩書房、2017年。
- 大角修『全品現代語訳法華経』角川文庫、2018年。

2022年度おやさと研究所特別講座「教学と現代」

『元の理』を描く」報告

金子 昭

3月25日、天理大学第1会議室を会場にして、おやさと研究所2022年度特別講座「教学と現代」（天理総合人間学研究室、天理ジェンダー・女性学研究室共催）が開催された。今回のテーマは「『元の理』を描く—生命・ジェンダー・芸術—」。講師は日本画家の村田和香氏。村田氏は天理教少年会海外版絵本『OYASAMA』を作画したことで知られている。コメンテーターは同志社大学嘱託講師の金子珠理氏である。3年ぶりに全面的な対面開催の講座となり、約70人が参加した。

「元の理」は天理教の世界・人類創造の物語であり、これまで様々な学問分野から探究がなされてきた。親神による泥海の中からの人間創造は、まさに「愛と苦心」の賜物であり、「生命（いのち）の委細」の物語である。村田和香氏は、美術表現を用いて「元の理」の新たな「読み解き」を行った。それは村田氏による「みえててみえん世界」への挑戦である。

今回の講座の元になったのは、2022年9月に開催された村田氏の個展「いのちのいさい」展（おやさとやかた南右2棟）における「元の理」を題材とした全30枚の連作絵画である。村田氏は、5年間を費やしたその制作過程と全30枚の作品の内容について、「元の理」の教理に即しながら解説し、参加した多くの天理美術ファンを喜ばせた。会場には、参考として「いのちのいさい」展で展示した全作品の複製が並べられ、また会場入り口には、「元の理」を曼荼羅様式で描いた新作「いのちのいさい」も展示された。

これら30枚の作品は、大きく3つの段階に分けられている。第1の段階は、原初の世界である泥海のカオスの中から、月日親神が人間を創造する際に、様々な水中生物に託して人間の雛型と道具を揃えていく姿である。ここは「かぐらづとめ」の意義を伝える「つとめの理話」として、天理美術で従来、最も力点が置かれてきた箇所でもある。しかし、村田作品は、さらに「元の理」の全プロセスの表現に挑んでいく。

第2の段階は、身の内の天然自然の働きを10に分け、一手一つのたすけ合いの中で、最初に生み出された「いのち」が成長と出直しを繰り返す過程である。この「いのち」は五分（1.5cm）で生まれ、九十九年ごとに三寸（9cm）、三寸五分（10.5cm）と、1回、2回の出直しを繰り返し、四寸（12cm）に成人した時に直していき。この3度目の出直しの際には、母なる「いざなみのみこと」もまた子等を含めて残らず出直してしまう。ここでは、出直しと誕生が二つ一つであることが示されている。

第3の段階では、めくるめくダイナミックな時の流れが展開される。「いのち」は虫鳥畜類と八千八度の生まれ変わりを経て、最後に残るのが「めざる一匹（一人）」。「この胎内に男女各5人の人間が宿った。そして、そこでもまた人間は五分から生れ、五分ずつ成人していく。八寸（24cm）から一尺八寸（54cm）、三尺（90cm）、そして五尺（150cm）に成人したとき世界は整い、人間は陸上の生活を行う。「元の理」は人間と世界の共進化過

程でもある。この間、九億九万年は水中の住居、六千年は知恵の仕込み、三千九百九十九年は文字の仕込みと教えられる。人間はこうして海から陸へ上がり、火を発見し、文字を持って文化を未来に伝えていくことになるのである。

「元の理」の全プロセスをここまで丁寧に辿った絵画作品は、ほとんど初めてと言ってよいかもしれない。村田氏は、「元の理」を暗記するまで何度も読み込み、時には路傍講演を行なったという。「元の理」の教学関連書はもちろんのこと、胎児の具体的な成長過程や、道具となる生き物に関する多くの科学的文献を繙く中から、突如として閃くイメージを絵筆を持って具象化した。こうして制作された30枚の連作絵画を通して、村田氏は、「元の理」が愛の物語であること、そして我々人間一人ひとりがみな陽気ぐらしプロジェクトを担う一員として「陽と気に生きる」ことを訴えた。

それを受けて、金子珠理氏は、「元の理」が「なる」（生成）の物語であることを、教祖とほぼ同時代の西洋の思想家（ニーチェ）や科学者（ダーウィン）を引き合いに出し、比較思想的に考察した。さらに、テイヤール・ド・シャルダンやホワイトヘッドがエコロジカル・フェミニスト神学（R. R. リューサー）に与えた影響を踏まえつつ、天理教エコロジー神学の可能性について言及した。

また「芸術とジェンダー」の視点から、村田氏が所属する「グループ台」（1993年結成のようぼく女性美術家の集まり）の活動に関して、1970年代から始まったフェミニズム美術史の見解を参照しながら、その意義と可能性について考察した。

最後に「信仰・生活・芸術」の関係性をめぐって、宗教社会学の見地から、「寺族」などの「聖職者の配偶者」問題および「宗教の社会貢献」が内包する問題に言及した。そして、教内に通説として残る「女は台」が、本来は「女も道の台」であることを再確認した。

芸術創造の内的時間構造を考えると、華道、茶道、武道といった「道」のつく「準芸術」に特徴的に見られる「求道性」を踏まえ、天理美術の本質が「求道」にあるのではないかと指摘した。その後、活発な質疑応答も行われた。

今回の講座は、講演者とコメンテーター、そして主となる企画者が、すべて女性であるという点においても意義があったと言える。

※今回の「教学と現代」の内容は、おやさと研究所のホームページにて動画配信中です。ご視聴ください。



「教学と現代」開催の様子

第 356 回研究報告会（2023 年 4 月 19 日）

「オーストラリアの天理教—ブリスベンでの現地調査報告—」
尾上 貴行

本報告では、今年 2 月に報告者がオーストラリアのブリスベンへ研究出張して実施した同地での天理教に関する現地調査に基づきその内容を報告した。まず天理教によるオセアニア伝道の歴史と現状について概観した後、ブリスベンに設置されている本部海外拠点の一つオセアニア出張所と西海大教会・空富分教会部属の空富豪州布教所についてのそれぞれの略史と現在の活動について、出張時に撮影した画像や動画を通して概説した。

つぎにオセアニア出張所開設 20 周年記念祭における中山善司真柱のお言葉を紹介した。真柱様は、出張所には「本部の単

なる事務的な出先機関ではなく、その土地所の教勢伸展を御守護頂くために、教会系統を超えて、人々が心を揃え合わせて活動するための芯となる役割」があり、出張所はオセアニア地域に在住する教友が「互いに助け合い、互いに心を練り合う場」であり、また「布教の拠点」であると述べている。このお言葉の下、現在行われている活動や今後の課題について、さらには現地教友へのインタビュー内容なども紹介しながら、オーストラリア人への布教と信仰の継承について検討した。

また、オセアニア出張所で長年行われている日本語教室に焦点をあて、天理教を事例としたオーストラリアでの宗教団体と日本語教育に関する研究について言及した。

報告後には、天理教の海外伝道におけるさまざまな事柄や課題について活発な意見交換が行われた。

2023 年度公開教学講座の ご案内

— 信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ（9） —

2023 年度の公開教学講座は、以下の日程でオンライン配信いたします。

- | | |
|------------|-----------------|
| 第 1 回 6 月 | 井上昭洋所長 |
| | 167 話「人救けたら」 |
| 第 2 回 7 月 | 尾上貴行研究員 |
| | 168 話「船遊び」 |
| 第 3 回 9 月 | 金子昭研究員 |
| | 122 話「理さえあるならば」 |
| 第 4 回 10 月 | 澤井治郎研究員 |
| | 146 話「御苦労さん」 |
| 第 5 回 11 月 | 島田勝巳研究員 |
| | 165 話「高う買うて」 |
| 第 6 回 1 月 | 堀内みどり主任 |
| | 113 話「子守歌」 |

2022 年度「教学と現代」

去る 3 月 25 日に開催された 2022 年度「教学と現代」「元の理」を描く—生命・ジェンダー・芸術—をオンラインで配信しています。

研究所ホームページよりご視聴ください。

2022 年度公開教学講座

— 信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ（8） —

オンラインで配信しています。研究所ホームページよりご視聴ください。

- | | |
|-------|------------------|
| 第 1 回 | 永尾教昭前所長 |
| | 151 話「をびや許し」 |
| 第 2 回 | 澤井真研究員 |
| | 111 話「朝、起こされるのと」 |
| 第 3 回 | 岡田正彦研究員 |
| | 139 話「フラフを立てて」 |
| 第 4 回 | 八木三郎研究員 |
| | 108 話「登る道は幾筋も」 |
| 第 5 回 | 森洋明研究員 |
| | 119 話「遠方から子供が」 |
| 第 6 回 | 堀内みどり主任 |
| | 126 話「講社のめどに」 |

グローバル天理

第 24 巻 第 6 号（通巻 282 号）

2023 年（令和 5 年）6 月 1 日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 井上昭洋

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒 632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan